



北海道バスケットボール協会  
指導者育成専門委員会  
2008 / 8 / 10(日)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 28

## 稚内中体連を観て

指導者育成委員会 幸丸政実

### 「大型選手が不在」

8月1日から3日間にわたって熱戦が切って落とされた2008年北海道中学校バスケットボール大会は大方の予想通り男子恵庭恵明中学校、女子北星学園女子中学校が優勝しました。両チームとも1月の新人戦で他を寄せ付けない力を発揮していて、夏の中体連までに追いつく中学校はないだろうと思われていました。

恵庭恵明中の攻守にわたるバランスの良さは他校を大きく引き離していました。女子北星中は伝統の走力に衰えがなく強いディフェンスに対して切り崩せるチームがないため一度も危ない場面がなく全試合を走り切っていました。

ただしこの両チームが全国的にみた場合トップのレベルにノミネートされるかという、いささか不安を感じます。今年の出場チームは全体的に小粒であったため、高さに悩まされるゲームが一つもなく、そういう意味では身長の高い者同士の戦いを制しただけのことと言えるからです。

プログラムから拾ってみますと男子でオーバー180センチは8名、そのうち185センチ以上は3名、しかも最高身長が186センチ一人という結果はいさ

さか寂しいものがあります。女子はオーバー170センチがわずかに6人で175センチ以上は一人もいない有様でした。

大きければいいとは思いませんが将来日本のバスケットボールを強くしようと努力している私たちにとっては大型選手のデビューが待たれます。今大会に参加した選手は約500名、そのうち3年生が260名、下級生が240名という分布になっていましたので、下級生の皆さんに大きくなって戻ってきてほしいと期待します。

#### 「エンデバー・一貫指導カリキュラムは浸透しているか？」

私は現在行われている北京オリンピックにバスケットボール競技が参加できない原因は一つに中央の組織がまとまりないこと、二つ目に全国的に一貫した指導がなされていないことがあげられると思います。

たとえばバスケットボールの原点であるミニバスケットボールの指導者を見ても、本人が体験したバスケットボールを子供たちに押し付けている場合が多く基礎基本をしっかり指導できるコーチは少ないといえます。外国ではジュニアの育成にしっかりした組織で一貫したカリキュラムで指導しているところが多いのでそのレベルの差は私たちの想像以上のものがあります。

バスケットボール協会の組織がしっかりしてもらいたいということもありますが、私たち指導者としてはどこへ行っても同じ指導が受けられる指導体系の確立を第一に望みます。日本のバスケットボール界の現状は名前の売れた指導者が以前から個人的にビデオやDVDをバラバラに発売し、協会が編纂して柱となる

指導体系が最近やっと出されました。これを「エンデバー・一貫指導カリキュラム」と言っています。

スキー連盟などから出されている「スキー教本」「スキー教程」などに比べると字が多くまだまだ改良の余地がありますが、一つの動きがあったことはうれしいことです。

私は今回中体連の全道大会に出場したチームがどの程度指導カリキュラムを基に練習しているのかを観察していましたが、まだまだというところでした。一貫指導カリキュラムがあるということも承知していないのではないかと思われました。今後ジュニア連盟が主催する大会にはJ A B B Aの指導者の資格を持ったコーチが入ってもらうような措置を考えていく必要があるのかと思いました。

### 「コーチの品格」

いつものことですが、ベンチに座るコーチに対してはマナーの向上を考えた方がいいと思われることがいくつかありました。今年は短パンで指揮を執るコーチはほとんどいませんでしたが一方選手に対する「罵詈雑言」には悲しくなる場面もありました。選手を叱咤激励することについてはコーチのそれぞれの個性もあるので、ある程度必要なことなのかもしれません。それが選手の士気を奮い立たせるためのものならギャラリーも容認するでしょうが、コーチによっては暗に相手チームを馬鹿にしたような話しぶりや、いかにも観衆を意識して誇らしげに笑いを取ることが目的で大声をあげている指導者もいます。

普通コーチの声はゲーム運びに分が悪い場合に選手を叱咤するはずですが、自

分のチームが優勢な時に怒っていることが多いのです。それは聞いていて非常に嫌味に聞こえます。観衆を意識して解説しているようなどなり声は聞きたくありません。自分のチームの敗北が濃厚になった途端声が無くなるのは一体どういうことでしょうか。

### 「審判の判定に対する準備」

今回審判団は「イリーガル・ユース・オブ・ハンズ」を意識してとり上げていたようです。このことは大変良いことで北海道では判定がゆるい手を使ったファールが本州では非常に厳しくとられるからです。一方ペイントエリア内の身体接触についてはまだまだオフェンスが有利な笛が多く、審判のレベルを磨いてほしいところです。審判は狭い視野で現象面だけ見て笛を吹くのではまだまだ一流とは言えません。ゲームの流れを読んでその中で処理をしていかなければならないのです。悪いことをしようとしてファールをしているのか、はずみで触ってしまったのかを読むことができる審判が育ってほしいと思いました。ファールを取り上げる審判のレベルを3段階に分けるとしたらC級は「とれない」B級は「とる」A級は「とらない」という言葉で整理できそうです。この気持ちが理解できる方は相当バスケットボールが分かっていると思います。

以上中体連北海道予選大会 I N 稚内の報告を終わります。

H B A (北海道バスケットボール協会) 指導者育成専門委員会